農業と科学　昭和51年8月1日(毎月1日発行)第237号
昭和31年10月5日　第3種郵便物認可
発行所　東京都千代田区霞が関3−2−5　霞が関ビル
チッソ旭肥料株式会社
編集兼発行人：伊藤和夫
定価：1部35円

農業と科学　1976 8
CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.

メロンの新品種「真珠」と「サファイア」の特性と栽培上の要点

八江農芸株式会社
育種顧問
南川勝次

大衆性のネット型ハウスメロンの品種改良は，長年にわたる育種家の野望であり，筆者もながい間これの育種に専念してきたが，画期的な2～3品種を育出することができた。

その一つが，昨年秋田県農業試験場で開催された全日本原種審査会で1位，特別賞を獲得した「真珠」であり，姉妹品種である「サファイア」とともに，市場や生産者の評判も意外によい。

すでに一部では集団産地化が計画されているので，これらの品種が実力を発揮しうるような，適切な栽培がなされることを念願して，栽培上の留意点を要約した。

育種経過

中近東産の純露地メロンに，アールス系温室メロンを交配して複合耐病性，緑肉の新親品種MN系群を固定した。これらにアールス系の分離系統などを組合せて，草性と耐病性が強く，かつ日持ちと輸送性も高く，ハウスの地床栽培に好適した温室メロン級の緑肉，ネット型のF_1新品種を育成し，それぞれ「真珠」，「サファイア」と命名して発表した。

特　性

耐病性：両品種ともに，親の耐病性を受けついで，ウドンコ病には完全抵抗性を示し，ベト病，蔓割病，蔓枯病などにも，かなり強い耐病性をもっている。

これが栽培の容易さと作柄の安定性，および多収の基調となっている。従って，蔓ぼけの防止をかねて接木の必要をみとめない。

草　姿：一見アールス系品種に似て茎は大きいが，やや小葉で葉肉は厚く，葉柄は短くて直立する性質があり，受光体勢がよい。草性が本質的に強健で，耐病性と相まって，草勢が生育末期まで衰えない特性をもち，これが糖度の安定と末期の玉伸びの原因となっている。

草姿と着花性の点から，真珠は立ち作りにも適するが，強いていえば，地這い作りに最適し，サファイアは立ち作り，地這い作りともに適する。

生　態：草姿，草性，耐病性，着花性などの点から作型，栽培様式に幅広い適応性をもっているが，強いていえば高温適応性は強いが，低温順応性がやや弱い欠点があるので，開花期から果実の肥大初期の保温には，作型の選定とともに留意を要する。

果　実：真珠は球形で1,500～1,600g，サファイアはやや腰高で1,400～1,500gが通例で，作柄いかんでは，さらに1～2割大きいものが数多い。灰緑白色の肌色にネットが密に発生し，アールス系温室メロン的な風格をもっている。とくに真珠のネットは密である。蒂落ちや玉割れは全く起らない。

果肉は淡緑色で香味にくせがなく，ち密で発酵性はない。糖度は15度程度が通例で，作柄がよければ17～18度のものも珍らしくない。ともに晩生で，成熟に50～60日を要する。花おちの周辺が軟化し始める直前が収穫期で，その後2～3週間の日持ち性がある。

＜目　次＞

§ メロンの新品種「真珠」と「サファイア」の特性と栽培上の要点……(1)
八江農芸株式会社育種顧問　南川勝次
§ 施設園芸に対する投資と採算……(3)
野菜試験場企画連絡室長　加賀見宏
§ カーネーションの栽培……(5)
神戸市中心の主要作型について
兵庫県農業総合センター　藤野守弘
§ 露地野菜に対する施肥法……(7)
～その将来の展望～
全農本所肥料農薬部技術普及室　安藤奨

栽培上の要点

作　型

西九州一帯：1月中旬～2月下旬まき・5月下旬～7月上旬収穫の春作と，7月中旬～8月上旬まき・10月下旬～11月中旬収穫の秋作の両型が，無加温ハウス地床栽培の標準型である。12月中旬～12月下旬まき・4月下旬～5月中旬収穫の作型は，生育前半期は加温しなければ成功しにくい。

特殊暖地：冬期の温暖さを活かして11月下旬～12月中旬まき・3月下旬～4月中旬収穫の春作と，8月中旬～8月下旬まき・11月下旬～12月中旬収穫の両型が成り立つ。

冷涼地：東北，北陸，北海道および高冷地などでは，夏期の冷涼性を活かして4月中旬～5月下旬まき・8月上旬～10月上旬の夏～秋穫りの作型が成り立つ。降雨量の少ない地域や時期には，トンネル栽培も可能である。

整　地

接木は行わないので，土壌消毒は予じめ完全に行っておく。30cm以上の高うねとし，ハウスの内外ともに排水の便をはかっておく。うね幅は2.5mを標準とし，株間は40cmにとり，立ち作りは2条植（a当り約200株），這い作りは1条植（a当り約100株）として整地する。

整　枝

這い作りでは，親蔓の本葉4～5枚を残して摘芯して子蔓2本仕立てとし，子蔓は25～30節で止まるように予じめ摘芯し，畦の方向に30度の角度で配置する。着果節以外の孫蔓は基部から除去し，結果枝は2葉を残して摘芯する。着果部位は春作は15～16節，秋作は12～13節に連続2果ずつ，すなわち株当り4果着生を目標とする。

立ち作りでは親蔓1本仕立て，1果成りを原則とし，熟練すれば2果連続着果，あるいは2本仕立ての2個着果も可能である。親蔓は30～35節で止まるように予じめ摘芯しておく。株元から80cm程度の高さに，すなわち春作は約18～20節，秋作では約15～16節に着果させる。

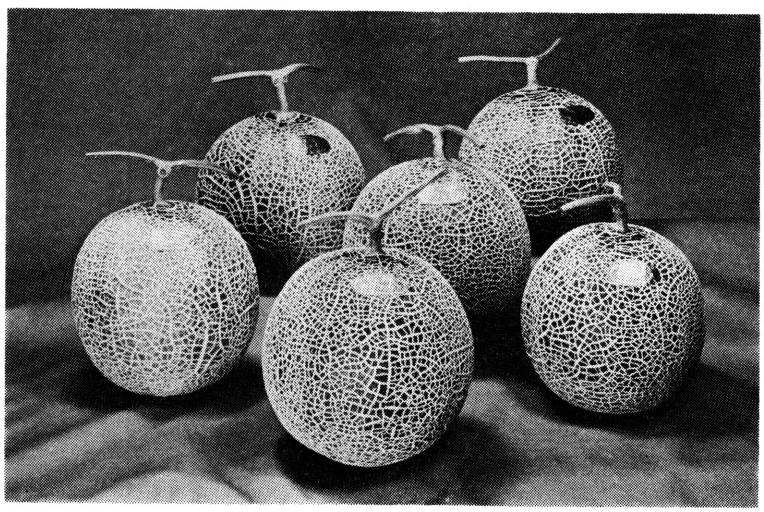
交配と温度

人工交配か蜜蜂交配を原則とし，ホルモン剤は過度の低温続きの時に，やむを得ず補助的に果梗処理を行う。蜜蜂の活動する温度は15～30°Cで，1㎡当り20～25匹を放つ。開葯して花粉が散るのは約15°C以上であり，着果適温は25～30°Cで，少くとも1日中で25°Cぐらいの温度が5時間はほしい。着果後連日温度が低いと，果実の肥大がわるい。

這い作りの「真珠」の着果状況

灌　水

定植後1週間ぐらいは株元に潤沢に灌水し，その後は株元から離れて行って適湿を保ち続け，交配時には控える。交配がほぼ終れば再び灌水し始め，果の肥大とともに量と回数を増し，ネット発現始めまでその調子で続ける。ネット発生期間中も，床面が乾くことのない程度に適度に灌水し続ける。

適湿であれば，ネットが発生し始めた後に2割程度は果実は肥大し，ネットも勢よく，美しく盛りあがって発生するのが両品種の特性でもある。

「サファイア」の熟果